

「民族文化」概念の可能性に向けて

ー 渡邊報告に対するコメント ー

高倉 浩樹

渡邊日日氏の報告「ソヴィエト民族文化の形成とその効果」は、「民族はどこにあるのか」という問題設定を行った上で、彼自身のブリヤートシアにおけるフィールドワーク中に感じたある疑問——それは、他民族から弁別された「ブリヤート民族誌」は成り立つのか？——から議論が始められている。これまで人類学が自明視してきた方法、「民族」を分析の対象とすること自体が、「現代世界のリアリティを見失うことになるのではないかという懷疑」を渡邊氏は抱いたらしい。そこで彼は、ロシア革命以前に存在していた「民族共同体」を想定し、社会主義以後の変容を分析するという枠組みではなく、「旧ソ連、社会主義圏、果ては近代国民国家に至るまでの共通点を抽出する作業」を模索しながら新たな民族誌記述の方法を検討したのであった。

旧ソ連で人類学的フィールドワークを行う研究者——筆者も含む——が共通して直面するのは「民族」が分析の対象に非常になりにくいという現実である。通常、人類学者は××地域には〇〇民族がいる—そういう前提で調査に行くことになっている。だが筆者の経験からも言えるが、実際に調査に出かけてみると、例えば人々の着ている服装、あるいは都市はともかく、農村にしても村の景観・風景や家屋の配置、構造、習慣、儀礼的实践といった内容ですら、自分がどこの民族の調査にきているのか、なかなか明確にさせないという状況がある。調査者の目に広がる〇〇民族の生活世界の状況を「ロシア化」という概念で説明する研究者もいるが、それは完全に誤りではないけれども、非常に不十分な状況しか示していない。例えば私の知人で、あるヤクート人女性がはじめて日本にやってくる「日本はヨーロッパ化されている」としきりにいう人がいた。これは初歩的な観光客の感想としては受け入れられるけれども、社会科学のいし人類学的な分析としては、ほとんど何もいっていないに等しい。シベリア原住民の諸民族の現在の生活世界をみて「ロシア化」ということは、これと等しいことだと思われるのである。「ロシア化」或いは「ソヴィエト化」どちらでもいいのだが、要するに本来の伝統的な或いは本質的な民族文化あるいは民族の共同体が存在していて、これがいかに変容したかという視点では、十分に彼らの生活世界をとらえることができない。この問題意識は私も含めてフィールドワークを行っている多く的人类学者に共有されており、いかに新しい分析枠組みを提示できるか模索されているのが現在の状況なのである。

渡邊氏のいう「ソヴィエト民族文化」というのは、こうした問題意識を共有する研究者の頭のなかに存在していた霧をはらすように、ある特定の領域を明瞭に照らし出すことに成功しつつある概念だと思われる。彼はソヴィエト普遍文化と様々な民族文化との相互作用の観点から「すべての民族文化（複数形）はソヴィエト国家の単一性（単数形）と調和されるもの」としてとらえられている。文化の複数性は『形式』において、単一性は『内容』において表象されることになる。民族文化は全面的に廃止されたり同化されたりするのではなく、その『形式』性

の枠内で発展すべき事象となる」と述べる。これは彼が引用しているスターリンテーゼの言い換えともいえるわけだが、まさにソ連の公式イデオロギーが、現実と分離するわけではなく、現実そのものを作り出す状況、あるいは「形式性」そのものがもっているリアリティを言い当てている。筆者としては「これは全く正しい」とスターリンを再引用しながら同意したい。

こうした渡邊氏の視角は、彼自身も触れているが、R・ブルーベーカーBrubakerの「制度論的アプローチ」と重なるものであり、とくに近年ソ連の文化制度に注目した民族誌としてアメリカのB・グラント[Grant1992]、カナダのD・アンダーソン[Anderson1992;1996]らの北米の人類学者たち——ちなみに筆者もその端くれにいる——によって最近取り上げられている問題でもある。渡邊氏の議論は、ソヴィエト時代の文化政策と民族の密接な関連性、或いは文化政策そのものが統治対象としての飼育慣らすことのできる民族という枠組みをいかに作り出してきたかを指摘しており、筆者も含めた人類学者がフィールドで体験する状況をうまく言い当てていると思う。

さらにこの問題を、旧ソ連だけの問題ではなく、いわゆる「近代化」の問題、社会主義圏だけでなく、近代国民国家に至るまでの共通性の問題として提起した点も重要であろう。つまりソ連における「民族文化」とは「社会主義圏」だけではなく、「近代国民国家」にも共通するような「社会文化的特質」としての「『民族』と『文化』という思考と実践の発明過程」であると規定している点である。これは少数民族・先住民族、最近の人類学では「周辺民族」という言い方も可能であるが、彼らと国家の関係、「国民統合」の一つの側面としての「国民文化」形成の問題と広がる可能性も持っているからである。

*

*

*

そうした高い評価ができる一方でいくつかの批判点もある。渡邊氏は「ナイーブな二元論を越えるために、本報告はいくつかの作業仮説を提示することを最終目的」とすると述べている。しかしながら、彼の報告論文読後に筆者が感じたのは、今後渡邊氏はどのように研究を行っていくのか、彼自身の「今後の研究プログラム」が十分に議論され提示されたとは言い難いということだった。彼は結論部で「本当の共同体」モデルは回避した方がいいと述べているが、これは彼の論理展開からすれば至極当然のことであって、すでに冒頭でも主張されていることを繰り返しているにすぎない。最終的に提示されているのは「知識の流通と社会的分布を追求する知識の人類学」であり、学校教育に注目していくということがいわれている。筆者は、渡邊氏のいう民族文化の「フォーマット化」が現在も進行中であるのは認めるし、その具体的対象として学校教育が上げられるのは理解できるが、この進行中のフォーマット化がポスト・ソヴィエト期の「現実世界のリアリティ」を理解する上でどのくらい重要なのか疑問なのである。

このことを明らかにするために渡邊氏の議論を先のブルーベーカーの分類にそって整理してみよう。彼によれば、ソ連国家システムにおいては「民族nation」は「領域的・政治的(national republic)」と「超領域的・文化的(nationalities)」の二つのレベルが同時に存在していたと述べている[Brubaker1997: 96]。渡邊氏の論じた領域というのはここでいうところの後者つまり「超領域的・文化的」民族の問題なのである。その意味でいうと、渡邊氏の「民族文化」概念は、スターリン民族定義でいうところの「前民族体narodnost'」に該当するいわゆる北方少数民族には問題なく適用できると思われるのだが、ブリヤートという(あ

くまで比較の上で) 巨大な「民族natsiia」を説明するのに十分であるのか少々疑問が残った。つまり「民族文化」概念とナショナリズムの関係である。現実的にはブリヤーチア共和国(旧:ブリヤート自治共和国)という地方自治体の単位が存在し、いわば「領域的・政治的」民族の領域が存在しているにもかかわらず、「民族文化」の議論からはそこへのつながりが見えてきにくい。もちろん学校教育という問題は「国民統合」の問題と絡んでくるので、全くつながらないと批判しているわけではない。ただ、ソヴィエト民族文化の一つの形式であったブリヤート民族文化が、なぜ或いはどのようにしてブリヤート自治共和国から現在のブリヤーチア共和国へと変えうる力をもったのか。またこうした広い意味でのエスノ・ナショナリズムの問題を「民族文化」概念はどのように説明できるのか、筆者は疑問なのである。

渡邊氏の論文には、上記の疑問に対する議論が全く欠けているわけではない。彼の議論では15頁に博物館の収集単位の問題が提出されており、そこでは民族ではなく村という原理が収集単位だったと述べている。彼は故郷原理が「同じ村というレベルからソヴィエト連邦という祖国まで拡大されうる概念」だったという。この指摘は、まさに二文化主義・「民族文化」形成がソ連の統治技術であるとの彼の主張とつながっている。多文化を認めることが社会経済的不均衡への注目を脇にそらす統治技術、つまり多民族を認めることが、不均衡への…と言い換えられるからである。国内パスポートなどで登録される「民族」これは徹底的に個人レベルの問題であるが、個人レベルでの多民族を承認する国家制度がそのまま民族共同体を承認するようには続いていかない/続いていかせない——そういう装置として、博物館などの文化装置「民族文化」が機能している、このように私は理解した。そうすると、なおさらフォーマット化された「民族文化」と、エスノナショナリズムとのつながりが見えてこないのである。

もう一つはより日常的なレベルの人々の生活実践と「民族文化」あるいは「知識の流通と社会的分布」との関わりである。渡邊氏の論文の注13でも触れられているように、個人レベルの民族natsional'nost'というのは、ほかの様々な属性と比べて特に重要だったとはいえなかった。「民族文化」というのは、あくまでの統治側が重要視するアイテムであって、もちろんそれは多くの人々のソ連時代のリアリティの重要な構成要素だったわけだが、ポスト・ソヴィエト後のつまり現在の「文化」の危機において、民族文化が彼らの現実世界を理解する上での鍵となりうるのかという疑問である。渡邊氏も述べているように「文化」は博物館のものであり、そこにかつてekspeditsiia(調査・探検)が存在し、博物館と学校教育が有機的にリンクし、それが祖国のイメージへと連なっていた。しかしながらそうした流れは、「文化の危機」である現在滞っている。多くの大人のインフォーマント達はフィールドワークする渡邊氏に向かって「文化」は博物館へ行けというらしい。つまり、民族文化は、人々の日常生活にとってどれほど重要であるか、それほど彼らにとって関心のあることではないのではないかという疑問が浮かんでくるのである。彼自身この報告は「作業仮説」の提示を目的とすると述べているので、ちょっと無い物ねだりに近いかもしれないが、その点についてもう少し論じてほしかった。学校教育の現状について多少具体的に触れられていれば、そのことは理解できることなのかもしれない。

最後に渡邊氏の論文の注34で取り上げられた私(高倉)のいう「ソヴィエト規格文化」にふれておきたいと思う。これは、これまで述べてきた渡邊氏の「民族文化」概念への批判に対して、私なりの解答というか、「現実世界のリアリティ」をとらえるための私自身なりに模索中の概念だからである。「民族文化」よりはもう少し曖昧というか広い概念である。まだ十分に練り上げてはいないが、非常におおざっぱにいうと全ソ連的に共通する生活世界の構造と景

観そのものを意味している。旧ソ連の工場でつくられた工業製品、或いはコルホーズ・ソフホーズといった経済システムが、ソ連全般に「規格化」された生活世界を提供し、そのなかには同時に渡邊氏が明確化した「フォーマット化された民族文化」が入っている——ちなみに私自身は民族の「形式性」としか表現していないが——という二重の構造になっており、そこに住んでいる人々は現実世界への対応に際してこの二つの構成要素のどちらを使うことも或いは使わないことも可能である。エスノ・ナショナリズムの問題も、現在の私有化或いは出稼ぎ商人などの社会経済的諸活動の営みにしても、「ソヴィエト規格文化」との対峙あるいは格闘であるという視角から、そうした人々の営みを理解できるのではないかと考えている [cf: 高倉 1998a, 1998b, 1998c]。

[付記] 以上のコメントは、シンポジウム当日の筆者の口頭発表原稿に対して語尾を除きほぼ修正・編集せずに文章化したものである。

参考文献

Anderson, D.

- 1992 Property Rights and Civil Society in Siberia: An Analysis of the Social Movements of the Zabaikal'skie Evenki, *Praxis International*, 12:83-105.
- 1996 Bringing Civil Society to an Uncivilised Place, In *Civil Society: Challenging Western Models*, eds. by C.Hann and E. Dunn, pp.99-120, London & New York: Routledge.

Brubaker, R.

- 1997[1994] Nationhood and the National Question in the Soviet Union and Post-Soviet Eurasia: An Institutional Account, In *Citizenship and National Identity: from Colonialism to Globalism*, ed. by T.K. Oommen, New Delhi, Thousand Oaks, London: Sage Publications.

Grant, B.

- 1992 *In the Soviet House of Culture: A Century of Perestroikas*, Princeton: Princeton U.P.

Takakura, H. (高倉浩樹)

- 1998a 「サハ・ナショナリズム再考：シベリア・ヤクーチアにおけるナショナルな意識と地域意識の相克」『社会人類学年報』24:123-140, 弘文堂
- 1998b Developing a Landscape: Toward Comprehending the Diversified Practices of the Peoples in Northern Yakutia, Siberia, In *The Proceeding of the 13th International Abashiri Symposium: Development and Environment in the North*, Abashiri: Hokkaido Museum of Northern Peoples (in press).

1998c 『レーニン・ソフホーズの形成と脱ソヴィエト化：北部ヤクーチアの地域社会とトナカイ飼育』 東京都立大学大学院社会科学研究科提出博士論文（未刊）